

サッカレイの幼少時代

梅 宮 創 造

サッカレイの家系を溯ると1600年前後にウォルタ・サッカレイなる男がいて、これがどうやらサッカレイの姓を名乗る最初の人物であったらしい。ヨークシャのウェストライディング地方で農業を営んでいたと云うが、この末裔は、十九世紀初頭に至るまで代々父祖の田地を護って農耕に従事して来た。いわゆるヨーマンの一族である。

ウォルタの代より更に時代を溯れば、サッカレイの原型と覚しきサックラス (Thakwras, Thackras, Thackwras) と云うような姓も見えるが、これは遙か昔、十四世紀初め頃の話になる。

農夫ウォルタ・サッカレイはハムスワイトの村に住んだ。後年、小説家サッカレイはこの村を「サッカレイ家誕生の地」と称んで、遠い古里にでも帰るつもりでそこを訪れている。

——低く連なる緑の岡のふもとに小さな寂しい村がある。ニッド川の土手にはヒースの花が紫に咲きあふれ、教会があり、傍らの流れに三つのアーチを持つ小ぶりの石橋が架っている。……¹⁾

このハムスワイトの村を初めて離れ、大学に入って学業にいそしんだのがエリアス・サッカレイで、これは十七世紀後半のことであった。家系の性格が茲で一変する。エリアスの甥がトマス、そしてトマスの末子が小説家サッカレイの祖父ウィリアム・メイクピースである。

トマスは伯父エリアスについてケンブリジ大学を出て、そのあとイートン校で教鞭を執り、ハロオ校の校長になり、果てはサリイの副監督にまで昇進した。十六人もの子を儲け、子供達はそれぞれ専門の職に就いて活躍したと云うから華やかなものである。農夫の筋から枝分れした一

族が、こうして、鋤や鍬の替りに頭脳を使って物を産み出すようになった。

サッカレイ家とインドの関わりはとりわけ無視出来ないが、これは祖父ウィリアム・メイクピースの代から始まる。祖父は十代半ばにして東印度会社書記官に推挙され、インドへ渡った。ときあたかもクライブのインド政策が実を結び、現地に於ける東印度会社の支配権が確立されたばかりの頃である。若きウィリアムの手中には母から贈られた聖書一巻があったと云う。

ウィリアムはインドで大いに出世して、帰国の折には既に一財産を拵えてウェップ中佐とやらの次女を妻に迎えた。以後、夫婦はロンドンの西北ハドレイの村に移り住んだが、後にサッカレイの語ったところでは、この結婚のお蔭で生来深刻なサッカレイ家の気質にウェップ家の快活な機智が加わったと云うことである。

サッカレイの父親リッチモンドも祖父と同様に十代の半ばでインドへ渡った。これまた東印度会社書記から出発してぐんぐん身を立て、やがてカルカッタに邸を構えたときには六十人だか七十人の召使を置いたと云う話である。頗る有能な人物であつたらしい。1810年にアン・ビーチと結婚して、翌年七月、後の小説家ウィリアムがこの豪奢な邸内に呱呱の声をあげたわけだが、この子はまるで小さな王子様のように育てられた——とゴードン・レイは解説している。

——二人の現地人召使が付き切りで子供の世話をした。子供は立派な館の高い天井付の広間で遊んだり、ときにはカルカッタの町のあちこちを見て廻った。黒んぼの乳母に連れられ、小ぎれいな牛車に乗って——散歩道を行き交ういろんな乗物やガンジス河の鱉などを眺めたものである。²⁾

サッカレイは月足らずで生れ、幼児のときから神経過敏にして甚だ繊細なところがあった。母親のアンにしてもまだ二十歳前の娘である。そ

れに命がけで出産したと云うので、我子が可愛くて仕方ない。何かしら盲愛に近いものがあつたようである。

母子の只ならぬ絆は、書翰集を覗いても判るようにサッカレイが二十、三十、四十になつてもそのまま続いた。母親に宛て身辺の状況を実に小まめに書き送っているのである。その間、『虚栄の市』や『ペンデニス』、或は『ヘンリ・エズモンド』のような作品を書いていたわけだが、サッカレイの諸作品のなかに女性の姿がとりわけ極立って見えるのも、思えば故無きことではない。

「彼の作品の多くは、約めて云うなら、最愛の女性に向けられた一連の私的な告白である」³⁾——こんなふうに断じている評家もあるが、この評言は頷けなくてもいい。

母方のバイチャ家について茲で簡単に述べておきたい。バイチャ家がアイルランド系とイングランド系の二つに分れたのは十六世紀のことで、爾来、イングランド筋からは牧師や軍人、官吏等が輩出した。そのなかにジョン・バイチャなる海軍大佐がいて、この人はサッカレイの母アンの祖父に当る。大佐は細君を連れてハンブシャのフェアラムに移り住んだが、アンはこの祖父母宅で育てられ、後にサッカレイもまた、小学校に入るためインドから帰国して暫くこの家に世話になった。晩年の随筆でサッカレイは次のように書いている。

——家の庭先に小さな男の子が臥ころんで初めての小説を読んでいる。「スコットランドの統領」と云うやつだ。小さな子は——今では老いぼれて、しかも小さいとは云えないが——その小説をひい婆さんの家の亭で読んだものである。ひい婆さんは八十歳であつた。ひどく粋なおしゃれ婆さんで、鼈甲の長い杖なんか手にして、ナイトキャップの下からは真白な巻毛——髪粉を振り掛けていたのかしら——つまり、くるくる巻いた髪がちょっとのぞいていた。それに可愛らしい黒ビロードの履物やら、踵の高い靴だのを履いていた。婆さんには海軍大尉の孫がいて、これは海軍大佐の息子のまた息子、或は海軍大佐の良人

の孫である。婆さんは古い小さな、愛すべきハンブシャの町に永いこと住んでいたが、そこは海軍大佐とか提督とか大尉などの細君、または未亡人、或は娘達の住む町なのである。——（中略）——遠い遠い昔の、あの穏やかな田舎町の光景が眼に浮ぶ。まるでオースティンの小説に描かれた町のように、ふと、オースティンもその町で生れ育ったのかしら、と思いたくなる。⁴⁾

十九世紀末にサッカレイ全集が出版された折、サッカレイの長女リッチイ夫人は各巻の巻頭に昔日の思い出を寄せたが、ここでもフェアラムの家の様子がちょっと触れてある。

——家はフェアラム広小路にありました。とても古風な奥床しい家で、高い急勾配の屋根やら小ぢんまりした玄関などが思い出されます。表の窓からは花壇が見えて、そのむこうに村の道が見える。裏手の窓の外にはきれいな果樹園が拡がり、そこを降りた所に川が流れております。昔、祖母が十六の頃この家を出てインドへ発ったのですが、何でも緑色の乗馬服に身を包んで旅立ったとか、祖母はよくそんな話をしてくれたものです。⁵⁾

茲で祖母と云っているのはサッカレイの母のことで、彼女がインドへ旅立つについては、その背景に一つの悲しいロマンスがあった。ベンガル工兵隊にヘンリ・カーマイケル＝スミスと云う青年がいて、この男とアンはひそかに婚約まで交していたらしいが、やがてとんでもない邪魔が入った。例の鼈甲の杖のおしゃれ婆さんが——尤も、そのとき杖を持っていたかどうか知らないが——孫娘の婚約に猛反対して恋人からの手紙をすっかり取込んでしまった。挙句の果てには、演技たっぷりに、恋人は死んだなんて大嘘をついたわけだが、娘はそれを真に受けて悲嘆にくれた。当時の様子をサッカレイの孫娘フラア夫人が生き生きと描いているので、茲に引用しておく。

—二人の逢引の場所はバイチャ家の庭のはずれにある高台であった。傍らに潮の流れ込む大きな川があり、川は町の縁に沿って流れていた。茲でアンは、恋人を乗せて来る船をいつも待った。ところが逢引は発覚して、アンは自室に閉じ込められ、鍵が掛けられ、二度とカーマイケル＝スミス少尉に逢わぬよう約束を強いられた。アンは命令に従わなかった。女中を介して少尉の手紙が巧みに届けられたのでアンは幽閉の身を慰めることが出来た。アンもまた同じ手口で恋人に手紙を書き送った。

しかし突然、手紙が来なくなった。或る日、バイチャ老夫人が重い足取で孫娘の部屋に入って来て、気をしっかり持って堪えなさい、と云った。少尉は俄かに高熱を発して亡くなったと云う。臨終の床で、永遠に変らぬ愛を我恋人に、と云っていたそうである。アンは黙って悲しみに打ち沈んだ。そのあと家族が鳩首協議して、傷心の娘は早いうちにインドへ旅立たせるのが良かろうと云うことになった。⁹⁾

若い娘をインドへ遣るのは、インド在住の金持に眼を着けて、恰好の結婚相手を我物にしてくれればいいと云う含みがあったらしい。事実、初めからそんな夢を抱いて東方へ赴く娘も少なくなかった。何だか『虚栄の市』の一章をそのまま読む思いがしないでもない。

アンはインドの地で首尾よく金持のリッチモンド・サッカレイと結婚して、これで一件落着と行けば良かったが、或る晩、リッチモンドの招待客のなかに死んだ筈の恋人ヘンリ・カーマイケル＝スミスが現れたと云うから、まさに事実は小説より奇也、と云いたい。これは余りに有名な逸話である。リッチモンドは間もなく他界して、その一年半後にアンは嘗ての恋人と結ばれ、カーマイケル＝スミス夫人となった。

アンがフェアラムの祖父母に世話になった事実は既に述べたが、アンの両親は一体どうしたものか、茲にもまた謂れがある。アンの父はジョン・ハーマン・バイチャと云って、妙なことに、サッカレイ家の人達に似てこちらも十代半ばで東印度会社の書記になった。現地ではリエツ

ト・クーパと結婚するが、この女にはアジア系の血が混じっていたらしく、従って娘のアンにも幾許かアジアの血が流れていると云える。

別に血のせいでもあるまいが、母親のハリエットは良人を棄てて別の男にくっ付き、棄てられたほうはやがて破産して死んでしまったから、穏やかな家庭とはお世辞にも云えない。アンはときに八つの娘であった。

ハリエットがなびいた男もほどなく急死して、まさに女盛りのハリエットはついでベンガル砲兵隊大尉のエドワードと結ばれパトラア夫人となる。なかなか活潑な女性であった。サッカレイはこの母方の祖母に大いに親しみを覚えて、若きパリ放浪の日々などには少なからず厄介になった。『虚栄の市』に登場する金持老嬢クロレーイは、この祖母がモデルとなっている。

サッカレイが誕生地を離れたのは五つの冬である。幼友達に従弟のリッチモンド・シェイクスピアがいて、この子が英国への旅の道連れになった。二人の母親はカルカッタの岸辺に立って子供達の出発を見送ったが、相手はまだ幼い子供だから、親子の別れと云ってもどこまで深刻に受取っていたものか判らない。ただ、このとき一種格別な悲しみの種子が子供の心の土壤に蒔かれたことは確かであろう。これがずっと後に芽を出して、サッカレイの様々な作品に葉を繁らせ実を付ける。例えば次のような一節がある。

——私達は互いに逢ってまた別れ、或は戦いに勝利を取め、或は破れて道半ばに人知れず斃れる。優しい母の膝許を離れるなり、早くも幼少期の辛い試練が始まるのだ。やがて大人になり、人生の闘いが、冒険や危険や負傷や敗北や、また榮譽などを引連れてやって来る。』

人生の試練でも、闘いでも、こんなものは経験を積んだ大人が口にすることで、子供の感受性となると大人のように働かない。もっと直截な生々しい現れを見せるものである。

半年の船旅を終えて本国に着いたのは、間もなく六つになろうと云うときであった。サッカレイはアーサ夫妻の営む学校に入れられるが、この学校は看板に偽りありで、随分乱暴なひどい所であったらしい。サッカレイは毎晩、小さな寝台の傍に跪いて、「どうか神様、お母さんの夢を見させて下さい」なんて祈ったそうだが、こういう所にこそ子供の心が現れている。幼いサッカレイのありのままの姿が眼に見えるようである。

或る寒い夜、寄宿舎の子供達は暴君教師に叩き起こされ薄暗い小屋に入って、一人ずつ妙な袋に手を突込むよう命じられる。袋から抜出した手はどれもこれも真黒と云うわけで、これが泥棒を発見する最良の方法なのだそうである。そんな学校時代の思い出が『ラウンドアバウト随筆集』に書いてある。サッカレイにとって学校は暗い冷たい、横暴極まりない所であったようだが、当時世話になっていたリッチイ叔母宛の手紙を見ると、意外にも少年の愚痴の類は一つも出ていない。尤も、怖い校長先生の手紙に同封されて届くのだから学校の悪口なんか到底書けたものではない。

サッカレイは翌年六月にこの学校を止めて、フェアラムのビイチャ婆さん宅で夏を過ごし、秋からはチジックのターナ学校へ通う。校長のターナ先生はサッカレイの親戚筋の人なので、こちらはどうかと云えば、前のアーサ学校とそれほど違わない。幾らかましと云う程度であったらしい。何しろ日曜ごとに子供達を集めて十戒が厳肅に朗読される、そんな学校なのである。サッカレイは蔭でひそかに先生の似顔絵なんか描いていた。その似顔絵はどんなものか知らないが、いろいろ空想していると、『虚栄の市』の俗物女校長の顔がぼんやり浮んで来るから可笑しい。

オースティン・ドブソンは、或る日、フラムからチジックまで歩いて次のような文章を綴った。

——僅かに左へ折れるとチジック・モルに出て、きらきら光るテムズ河が再び眼に入る。河には細長い小島、柳青めるあの小島が見えて、私の散策もそろそろ終りに近い。小ぶりの硝子窓や古風な鉄門の付い

た古いきれいな家、そんな家々の立ち並ぶ道をぶらぶら歩いてゆく。私は知らず識らず、かの有名な「お嬢さん学校」を探しているのである。その門前で、オデュッセイアの波瀾万丈の始まりよろしく、『虚栄の市』のレベッカ・シャープ嬢が気の毒にも優しいジェマイマ・ピンカートンさんめがけてジョンソン辞典を投げつけたものである。⁸⁾

『虚栄の市』第一章で俗物校長の営むピンカートン女学校があんまり鮮やかに描かれているものだから、いつの間にか作中から躍り出て現実の学校のごとき印象を与えてしまう。ドブソンでなくても、前述のようなことはよくある。女学校の原型は現在のウォルポール館であつたらしいが、⁹⁾それはそれとして、この学校の醸し出す趣には何よりもサッカーの幼少時の体験、つまりチジックのターナ学校での日々が滲んでいと云っていい。

サッカーがターナ学校に入って二年目の夏、漸く母がインドから帰って来る。サッカーとしては待ちに待った母との再会である。

——坊やは黙ったまま私にキスして、何度も何度も私の顔を見るのです。私はついこんなことを口走りそうになりました。「ああ神様、こうしてお救い戴いたところで、どうか安らかに眠らせて下さい」¹⁰⁾

母親が一人息子と離ればなれに暮らして辛くなかった筈はないが、息子にしても、母に会ったいま、ひとえにその顔を見つめるばかりで一言も云えない。この沈黙には子供の大きな戸惑いや感動が込められている。

サッカーは子供ながらに母の心底に揺れている複雑な気持を感じ取っていたのかも知れないが、言葉で巧くそれを伝えられないから黙っていた。そんなふうに考えたい。それがやがて、例えば『ペンデニス』のヘレンの淋しい表情に（第十六章）、また『ヘンリー・エズモンド』のカーズウッド夫人の言動に一個の形となって結実する。

『ヘンリ・エズモンド』第二部第六章に描かれている再会の場面は忘れがたい。何だか宗教画でも見ているような一種荘厳な思いに満たされる。幼いサッカレイの面影が見え隠れするようなので、その一節を引用しておきたい。

——エズモンドがまだ幼い頃、夫人は姉であり母であり女神であった。夫人の脆い一面を知ったいまでは、彼女はもう女神ではない。思いつめ、悩み、辛い日々を送るうちに夫人はすっかりやつれてしまった。だが、嘗て神のように仰ぎ見ていたときよりも、女性としてと云うべきか、いまはずっと親しみが感じられる。どういことだろう。あの小さな手が何物にも替えがたいとは、一体その秘密は何処にあるのか。果して誰がこの謎を解き明せよう。茲にこうして夫人と、そして傍には子息が、あの懐しい男の子がいる。夫人は嬉し涙を流して、いま茲にいるのだ。……¹¹⁾

カースルウッド夫人のモデルはサッカレイが一方ならぬ慕情を寄せて来たブルクフィールド夫人と云うことになっているが、麗しい恋人でもサッカレイの手に掛ると忽ち母性の証が、母の温もりが、行間にほのぼのと現れて来るから妙である。先刻の引用の続きになるが、夫人は感極まってエズモンドにこんなことを云う。

——いつかまた、貴方のためなら、私はどんなに遠方からでもやって参ります。深く傷つくようなことがあれば、そのときにはどうぞ私の所へいらっしゃい。いいえ、黙って。お仕舞まで云わせて頂戴。……¹²⁾

母子の繋がりと云えばそれまでだが、サッカレイにとってこの種の触れ合いは非常に重大な意味を持っていて軽く扱えない。それが或る評家に依れば、サッカレイの作品はこんな甘い感情ですっかり台無しになっていると云う。サッカレイの佳い持味が雲散霧消してしまっているのだ

そうである。例えばジョン・カレイなど、サッカレイが如何にもサッカレイらしい筆を揮っていたのは『虚栄の市』までだと断言する。それ以後は「母性崇拜」の観念に搦められ、束縛され、作品は何れも生彩を欠いていると云うから随分思いきった論断である。¹³⁾

しかしそこまで過激にならなくても、サッカレイと女性、サッカレイと愛、また広くサッカレイの人間観と云うような問題は避けて通れまい。茲では深入りしないが、これはサッカレイの作品鑑賞の表裏にいつも明滅している大問題である。

話を次に移すが、サッカレイと義父の関係もまた興味深い。インドから帰って来たカーマイケル＝スミス少佐は後年『ニューカム一家』に描かれるけれども、サッカレイは総じてこの義父に好意を抱いていたようである。

子供好きのニューカム大佐がインドから帰国する。早速息子の学校を訪れると、生徒達が大佐の周りに集って来る。息子は胸を高鳴らせて父親と再会するが、父親のほうも成長した息子の姿を見て喜びを隠せない。こういう件りはいつ読んでも気持が好い。甘いと言えば甘いだが、この甘味もまた棄てがたい。

サッカレイが1822年六月に入学するチャータハウス校は義父の母校でもあった。この学校は十四世紀の修道院を模して建築されたと云われるだけに、建物のみならず、学校内部にまで様々な旧弊が入り込みしつこく残っていた。サッカレイは茲で六年間の学校生活を送る。その当時は回顧してスロータハウス（屠殺場）なんて振っているぐらいで、とにかく厭な日辛い日が多かったらしい。上級生との固い主従関係、寄宿舎での束縛、退屈な学業、どれを取ってもサッカレイの気質にはまるで合わない。母に宛てた手紙にこんな文章が見える。

——毎日、ラッセル先生は僕に辛く当り意地悪をするので、もうやりきれません。一所懸命励んで、それが花開く前に摘まれてしまうなんて堪らない。頑張って良い成績を収めても、必ず下の学級へ落されて

しまうのです。——（中略）——この二年間で百人の生徒が止めて行きました。先生は勿論、そのことに腹を立てています。いまでは生徒数も三七〇人に減りましたが、いっそのこと、三六九人であればいいと思っています。¹⁴⁾

サッカレイは学校嫌いだったけれども友達付き合いのほうは頗る良くて、仲間同志でクルークシャンクばりの漫画を描いたり小説や詩を盛んに読んで日を送った。その頃読んだ文学作品は多方面に亙るが、例えば十八世紀英国の小説および随筆、ゴシック・ロマンス、それにワーズワス、バイロン、キーツ、シェリーの詩、他にもいろいろ挙げられる。とりわけ熱心に読んだのはシェイクスピアとスコットの作品であつたらしい。それから当時発行された文藝雑誌の類も貪るように読んだ。本を読みすぎたせいかどうか判らないが、サッカレイは早くも近眼になって眼鏡を掛けている。

チャータハウス校に入って二年後、サッカレイは寄宿舎を出てボイス夫妻の家に下宿することになった。その家にフレデリック・ボイスと云う息子がいて、この人物が長じて当時を振り返り、サッカレイの学校時代について書いている。これは大そう面白い記録なので、その一部を以下に紹介しておきたい。

——サッカレイと親しかったのは、彼が十三から十五になるまで、そして十六歳のときの半年間である。サッカレイは当時、ばら色の頬に黒い巻毛が目立ち、生き生きした賢そうな眼にはユーモアが、あの温か味のあるユーモアがいつも耀いていた。体格はずんぐりむっくりで、後にあれだけのっぼになるなんて考えられなかった。間もなく学校を終えようと云うときに、永くはないけれども重い病に罹って、そこで奴さん急速に背が伸びた。病床を離れてみたら以前よりとんでもなく大きくなっていて、同級の生徒達を一ぺんに抜いてしまった。この男ほど、精神の成長のためにはべら棒な時間と努力を要しながら、一方、

背が伸びるのにあれだけ近道した者は他にいまい。¹⁵⁾

ボイスの回想録ではこの他にも、サッカレイが野外スポーツや算数を嫌ったこと、弁論クラブに参加しながら話をするのが好きでなかったこと、減多に腹を立てなかったこと、他人を過大評価して自分を過少評価する癖があったこと、いろいろ記してあって面白い。

チャータハウス校時代の出来事で、時期が前後するけれども、もう一つ書き添えておきたい。入学して僅か数箇月後、サッカレイは鼻柱を折ると云う途轍もない災難に遇った。上級生の某が退屈しのぎにサッカレイと別の男の子を格闘させ、その結果、サッカレイが鼻に痛撃を喰って血を流した。ぱりぱりと骨の折れる感じがあったそうである。闘いの相手はジョージ・ヴェナブルズと云う少年で、サッカレイは以後、鼻の潰れた男になってしまったが、それなのに相手を少しも憎まなかったと云うから驚く。サッカレイが物を書くようになって、ときどきミケランジェロ・ティトマーシなる筆名を用いたのも、かの高名な彫刻家がまた鼻潰れだったからである。サッカレイの性格の一片がこんな所にも見られる。

とんでもない加害者となってしまったヴェナブルズにしても、心穏やかであった筈はないが、被害者のほうが莫迦に呑気なものだから、その後も二人の親交はずっと続いたそうである。ヴェナブルズが学校時代のサッカレイを回想してトロロープに書き送った手紙があって、例の格闘の件には触れていないが、これもサッカレイの一面がよく出ているので引用しておく。

——サッカレイは年少で入学して来た。可愛らしい、優しい、それにちょっと臆病な少年でした。彼の学校生活は概して楽しいものではなかったように思う。ラテン語の深い知識を身につけたのはずっと後のことで、学校では特に優等でも何でもなかった。校長のラッセル博士と云う人は、ひどく気性の激しい、同情心の薄い、冷酷とは云わぬま

でも厳格な人柄で、サッカレイとは肌が合わなかったようです。友達
は皆サッカレイを矢鱈にもてはやしたけれども、勝ち負けの遊びとな
ると奴はからきし駄目で、と云うよりも、少年の遊びなんかまるで興
味がなかった。……

サッカレイは既に詩作の才能を、就中パロディ作成の才能を認めら
れていました。一つだけ憶えているのは、L・E・Lの詩の一行に「ス
ミレ、暗き青きスマレよ」と云うやつがあって、サッカレイはこれを
捻って「キャベツ、明るい、緑のキャベツよ」とやった。これには私
達一同えらく感心したものです。サッカレイは校内雑誌の発行なども
計画したようだけれど、これは実現しなかった。雑誌のために書いた
詩が、なかなかの出来栄えだったことだけを憶えています。

後年、サッカレイを更によく識るようになって、少年の頃のあの繊
細な気質とやらが漸く判ったような気がしました。……サッカレイが
学校時代を自ら振り返ってみるときの、あの気持の変化には非常に興味
深いものがあります。初期の作品では、いつもチャータハウスのこと
をスロータハウスだのスミスフィールド（肉市場）なんて称んでいな
がら、やがて有名になり脂が乗るにつれ回想のほうも和らいで、スロ
ータハウスはグレイフライアズ（修道院）に変わり、ニューカム大佐な
どはそこで生涯を閉じることになっています。¹⁶⁾

『ニューカム一家』の末尾を書くにあたってサッカレイは正確を期する
ためにチャータハウス校を再訪した。無論、学校では偉い小説家がやっ
て来たと言っただけで大騒ぎになったわけだが、こうなればサッカレイとし
ても堵殺場の思い出ばかり吹聴するわけに行かない。厭な思い出は薄れ、
懐しい日々が、昔の友達が、眼前にありありと浮んで来たことだろう。

サッカレイの性格からすれば、それも無理からぬことのように思われる。
サッカレイがチャータハウス校を出るのは1828年五月、即ち十七歳の
ときである。「チャータハウスにてサッカレイは初期の人生訓練を受け
た」¹⁷⁾——そう云っても良さそうだが、愈々山なす人生の荒波が襲って来

て、頭上に大きく狂おしく砕け散るのはこれから先なのである。

註

- 1) Gordon N. Ray, *Thackeray, The Uses of Adversity* (Oxford University Press, 1955) p.21.
- 2) Gordon N. Ray, *The Buried Life* (Oxford University Press, 1950) p.13.
- 3) *Ibid.*, p.124.
- 4) Thackeray, 'On a Peal of Bells', *Roundabout Papers* (Smith, Elder & Co., London, 1876) pp.286-287.
- 5) Anne Thackeray Ritchie, 'Centenary Biographical Introductions to the Works of William Makepeace Thackeray', *The Two Thackerays* (AMS Press, Inc., New York, 1988) Vol. I, p.350.
- 6) *The Uses of Adversity*, p.58.
- 7) Thackeray, 'On Letts's Diary', *Roundabout Papers*, p.195.
- 8) Austin Dobson, 'A Walk from Fulham to Chiswick', *Side-Walk Studies* (The World's Classics, Oxford University Press, 1924) pp.244-245.
- 9) Lewis Melville, *The Thackeray Country* (Adam and Charles Black, London, 1905) p.31.
- 10) Letter from Mrs. Carmichael-Smith to Mrs. Butler, 10? July 1820, *The Buried Life*, p.14.
- 11) Thackeray, *The History of Henry Esmond, Esq.*, pp.201-202.
- 12) *Ibid.*, p.206.
- 13) John Carey, *Thackeray, Prodigal Genius* (Faber & Faber, London, 1977) 第一章参照。この点に関して、他には J.Y.T. Greig, *Thackeray, A Reconsideration* (Oxford University Press, 1950) が大いに参考になる。
- 14) Gordon N. Ray (ed.) *The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray* (Oxford University Press, 1945) Vol. I, pp.24-25.
- 15) Philip Collins (ed.) *Thackeray, Interviews and Recollections* (The Macmillan Press LTD, 1983) Vol. I, p.7.
原典は John Frederick Boyes, *Memorial of Thackeray's School-Days*
- 16) Anthony Trollope, *Thackeray* (AMS Press, New York, 1968) pp.4-5.
- 17) *The Uses of Adversity*, p.98.